

ハンドボールにおける教育環境に関する事例研究

富田 恭介

Case study of educational environment in handball

Kyosuke TOMITA

第1章 序 論

大学部活動の指導者は1年間のスパンでコーチング回路¹⁾を作動させ、実践している。

筆者は、急きょシーズン途中で退任した前任監督の後を引き継ぎ、2016年7月に中部大学ハンドボール部の監督に就任した。前任監督である蒲生晴明氏は、2度の男子日本代表監督を務めた経験を持つ日本屈指の指導者である。筆者は、学生達をどう育成していけば良いのかについて毎日考えていた。学生達を取り巻く環境をより良いものにしていくことで学生達を成長させてあげられるのではないかと考えたことが研究着手の動機である。

宮原²⁾は、「環境は、大きく分けて物理環境・時間環境・気象環境・情報環境の4つに分けられる」と述べ、さらに、人間の成長や発達に、特に大きな影響を与える教育環境については、「情報環境であり、物理的世界について認識を通して構成される心理的環境である」と述べている。愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期3年博士課程）共同教科開発専攻³⁾では、教科開発学の専攻の分野の一つとして「教育環境学」が設置されており、「子ども、学校、地域、社会を含めた幅広い学校教育を取り巻く多様な環境領域を体系的に研究し、教科の土台や基盤を追求」するために、様々な教育環境領域において研究が進められている。このように、学生をとりまく環境が私たちに大きな影響を与えていることは言うまでもないことであり、すべての学生にとって、「教育環境」が重要なことは明らかである。

組織が保有する資源について八代⁴⁾は、「企業の経営活動において必要とされる経営資源は、人

的資源、物的資源、財務的資源、情報資源の4つに分類されることが多い。体育・スポーツ経営体においても、これら経営資源を組み合わせることにより、体育・スポーツ事業へと結びつけることになる」と述べている。これらを宮原が述べた教育環境に当てはめてみると、「心理的環境」は、「物理的世界について認識を通して構成されるもの」であるため、「組織が保有する物理的な資源についての認識を通して構成されるもの」と読み替えることができると考えられる。また、「情報環境」は、「情報資源」と読み替えることができると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、中部大学ハンドボール部が保有する「教育環境」を「人的資源、物的資源、財務的資源、情報資源で構成される環境」と定義する。

本研究は、2つの事例研究から得られた教育環境に対する知見を基に、今後の中部大学ハンドボール部にとっての理想的な教育環境を構築していくために有用な一資料を得ることを目的とする。

第2章は、中部大学ハンドボール部における指導に関する事例研究である。この事例研究では、同一チームを指揮した2人の指導者の実践知と実際の試合内容とを比較し考察することで、指導者である人的資源とその指導者の指導法である情報資源に関する知見を得ることが目的である。第3章は、短期間の韓国へのハンドボール留学が選手に与える影響に関する事例研究である。この事例研究では、49日間のハンドボール留学が2人の学生に及ぼした影響について、留学前後のハンドボール観などの意識の変容を質的に明らかにすることで、理想的な教育環境についての知見を得る

ことが目的である。第4章は、総合考察である。2つの事例研究により得られたそれぞれの教育環境に対する知見についての考察を行い、それを基に今後の中部大学ハンドボール部にとって理想的な教育環境の構築についての具体的な提案を行った。

第2章 ハンドボールにおける指導に関する事例研究：2016年度中部大学ハンドボールチームを指揮した2人の指導者の語りとゲーム分析を手がかりに

大学ハンドボール界を代表するチームの1シーズンにおける、同一チームを指揮した2人の指導者の実践知と実際の試合内容とを質的、量的の両面から比較検討し、考察することで、指導者である人的資源とその指導者の指導法である情報資源に関する知見を得ることを目的とした。

対象チームは、東海学生連盟に所属する中部大学男子ハンドボールチームである。研究方法は、量的研究ではゲームパフォーマンス分析を用いて、2人の指導者が率いた春季リーグ戦期間と秋季リーグ戦期間の各9試合の各シュートエリアでのシュートおよびミスの生起数を求め、比較検討した。また、質的研究では、2人の指導者にインタビュー調査を実施し、発言内容をまとめたテキストを作成し、それぞれの内容を質的に分析した。

表1 記述的ゲームパフォーマンス分析の結果

	中部大学			相手		
	春季 (n)	秋季 (n)	有意差	春季 (n)	秋季 (n)	有意差
ミス	23% (571)	21% (561)		25% (572)	22% (572)	
ディスタンス	29% (571)	22% (561)	*	29% (572)	36% (572)	*
サイド	11% (571)	13% (561)		12% (572)	9% (572)	
ポスト	7% (571)	9% (561)		6% (572)	8% (572)	†
カットイン	10% (571)	15% (561)	*	13% (572)	10% (572)	†
速攻	16% (571)	15% (561)		14% (572)	13% (572)	
7m	4% (571)	4% (561)		2% (572)	2% (572)	

*: 春季と秋季の間に5%水準で有意差があることを示す †: 有意傾向であるP<0.1

その結果、①指導者が変わっても前任監督の考え方がチームと選手に浸透していたこと、②前任監督のチーム構想を後任監督も引き継ぐことでチームは成長したこと、という知見が得られた。

第3章 短期間の韓国へのハンドボール留学が選手に与える影響に関する事例研究

本研究では、49日間の韓国へのハンドボール留学が2人の大学生にもたらした、ハンドボール

観などの意識の変容について、質的研究法を用いて、留学へ行く前と行った後のインタビュー調査の内容について質的に分析し、留学前後の学生の意識がどのようなきっかけでどのように変化していったかを明らかにすることを目的とした。

本調査の対象者が行ったハンドボール留学は、2人の対象者である学生が所属する中部大学と学術交流協定を結ぶ韓国の圓光大学への留学である。期間は、春休みを利用しての49日間であった。調査の流れは、まず、2人の学生に対して留学前と後に同じ質問項目の構造化インタビューを行った。留学前後の前後の内容を質的に分析し、キーワードを抽出し、キーフレーズとしてまとめた。2人の調査者が解釈できないものについては、半構造化インタビューを用いてひとつひとつの意味内容を確認し、変化の内容について深く掘り下げて意見を聞いていくという作業を行った。

本研究では、理想の選手像のプレー面と精神面、技術観、セットディフェンス観、速攻とセットオフense観すべてにおいて、変化や構築があったことが明らかになった。意識の変容をもたらしたきっかけについては、以下のようにまとめた。①内発的動機付けに基づく、学生の留学に対する主体的取り組み姿勢である。②49日間でもレベルの高い環境で練習を行ったことである。③チームメイト（仲間）との関わりと学び合いである。

第4章 総合考察

第1節 2つの事例研究から得られた知見について

第2章では、「指導者が変わっても前任監督の考え方がチームと選手に浸透しており、それを引き継ぐことでチームは成長した」という知見を得た。これは、指導者は選手にとって、とても大きな影響力があると言い換えられるのではないだろうか。では、何が影響しているのか。それは指導者のハンドボール観、すなわち価値観であると考えられる。宮原⁵⁾は、「教育環境の中で最も大切なのが、親や教師の持つ価値観である」と述べている。前任監督は18年間という長い期間を通じて、1年1年チーム作りを行ってきた。その中でチームや選手に自分の価値観が浸透していったのだと考えられる。また、価値観というものは長い

期間の中で形成されるものなので、それを変えようとしても、なかなか変わらないものである。だからこそ、前任監督がいなくなった後も、選手たちに前任監督の価値観が選手の価値観として残り、チームを成長させたと考えられる。

第3章では、学生の意識の変容をもたらしたきっかけについて「内発的動機付けに基づく、学生の留学に対する主体的取り組み姿勢である」[49日間でもレベルの高い環境で練習を行ったことである]「チームメイト（仲間）との関わりと学び合いである」という知見を得た。研究において留学を経験した学生は、「レベルの高い環境」という人的資源と「チームメイトとの関わり」という情報資源が相乗効果を生み出した結果、内発的動機付けを高めたと考えられる。鈴木ら⁶⁾は、「各スポーツ独自の楽しさは、そのスポーツ独自の技能を介して認知されると考えられている。特定のスポーツに対する内発的動機付けを強化するためには、そのスポーツ独自の楽しさをより深く体験できるように、練習を通じてそのスポーツ独自の技能を向上させていく必要がある」と述べている。ハントら⁷⁾は、『豊かな環境とは「応答的な環境」であり、「応答的環境」によって、子どもの言葉をはじめとする能力、意欲や自発性、さらには、他者に対する信頼感が培われていく』と述べている。「応答的環境」について、ハントらによる発達における相互作用説⁷⁾では、『人間に対して影響を与えるのは、環境それ自体ではなく、その環境との間でどういった相互作用が行われるかということであり、人間が環境に働きかける行為と、それに応じて環境から「応答」が返ってくるのが重要である』と提唱されている。このことから、宮原⁸⁾は、『「応答的な教育環境」とは、人間が環境と「相互作用」を行うことを活性化し、継続させるための環境からの「応答性」を重視した環境である』と述べている。つまり、韓国での「チームメイトとの関わりと学び合い」は、内発的動機付けを高める「応答性」を重視した教育環境であったと考えられる。

内発的動機付けと豊かな教育環境とされる「応答的環境」の概念から考えると、学生は「ハンドボールが上手になりたい」と自ら意欲的に韓国留

学を希望し、それに対してレベルの高い韓国の指導者、チームメイトという人的資源である教育環境が存在し、それらとの「相互作用」すなわち様々なやりとりが行なわれ、その過程が貴重な経験となり、選手の技術の向上やハンドボール観や精神面の変化に繋がったと考えられる。

第2節 理想的な教育環境の構築について

理想的な教育環境を構築していくためには、教育環境を構成するすべての要因が、単独で作用するのではなく、相乗効果を生み出す必要がある。得られた知見は、「指導者は、正しい価値観を持つべきである」ということ、2つ目と3つ目は、学生の内発的動機付けを高める要因について整えることである。その要因は、「レベルの高い環境」と「チームメイトとの関わり方のしくみ」である。以下にそれぞれの知見に対する具体案を述べる。

1つ目の知見に対しては、指導者である筆者が自分自身の正しい価値観を持ち、それを磨いていくこと、そして、それを選手に言葉で伝えられること、選手の価値観と自分の価値観のギャップを理解し、対話ができることが大切であると考えられる。指導者と学生が対話を繰り返すことで、学生の価値観が少しずつ変化し、さらに学生から学生へとその価値観が受け継がれ、チーム全体の価値観として積みあがっていくと考えられる。

2つ目の知見に対しては、練習に取り組む意識を高めるために、学生自身の自己決定感と、こんな技術を身につけたい、ハンドボールは楽しいという有能さの認知が出来るようにすること、また、高いプレーの質を体感するために、技術、体力、精神面での高い質を身に着けた日本最高峰のリーグに所属する選手と練習を行うことが考えられる。

3つ目の知見に対しては、仲間同士の関わり合い、学び合いを提案していきたい。特に大学の部活動は同学年同士の横のつながりだけでなく、先輩や後輩といった縦のつながりが存在する。先輩と後輩の理想的な関係は、先輩が指導者となって後輩を導く関係であると考えられる。経験をもった先輩との相互作用によって、後輩は成長していくというしくみである。また、先輩も自分の持っている経験を相手に伝えるという行為を行う中で

成長していくことが期待できる。

第3節 結語

これらの知見から得られた具体案は、理想的な教育環境を構築するために必要な要因の一部から考えられたものである。よって、本研究で得られた具体案は、一資料として取り扱うべきである。この資料は、今後継続的に様々な事例を積み重ねていくことで役立つ情報や知見となると考えられる。そこでまず行うべきことは、今回得られた資料を実践することによる効果について事例的に検証することであるとする。そうすることによって、本研究を現場に還元できる研究にしたい。

主要参考文献

- 1) 久保正秋：コーチング論序説. p70-73, 不昧堂出版, 1998
- 2) 宮原英種・宮原和子:人間環境論. p17, ナカニシヤ出版, 2006
- 3) 国立大学法人愛知教育大学・国立大学法人静岡大学：愛知教育大学・静岡大学教育学研究科（後期3年博士課程）共同教科開発学専攻 2015年度報告書 ROAD4. p4, 国立大学法人愛知教育大学・国立大学法人静岡大学, 2016
- 4) 八代勉, 中村平編：体育・スポーツ経営学講義. p56-72, 大修館書店, 2002
- 5) 宮原英種・宮原和子:人間環境論, p77, ナカニシヤ出版, 2006
- 6) 鈴木直樹・成家篤史・石塚論 ほか:子どもの未来を創造する体育の「主体的・対話的で深い学び」創文企画, p155, 2017
- 7) ハント著・宮原英種訳:第3章 どのような環境条件が子どもの知的発達を促進するか 中島誠監訳, 子どもの知能はどのように育つか, 新曜社, 1990
- 8) 宮原英種・宮原和子:人間環境論, p112, ナカニシヤ出版, 2006

(指導教員 山下 純平)